

週日の説教

金 大烈 神父 2008年7月1日(火)

《預言者としての務め》

今日の第一朗読(アモス3・1-8)の主人公はアモス預言者です。

旧約聖書を読むといろいろな預言者が出てきます。その預言者たちの共通点は、あまり良い暮らしができなかった、ということです。なぜならば、ほとんどの預言者達が、権力を持っている者に逆らう話をしてしまったため、権力を持っている人々の立場ではそれがよいものに見えなかったからです。とにかく旧約の預言者達の中で、与えられた寿命をまっとうした人はほとんどいません。“預言”というのは間違えたことに対する「それはいけないですよ」という叫びだから仕方のないことなのかもしれません。

私たちは、洗礼を受けるときに三つの務めをいただきます。一つ目は【司祭職】、二つ目は【王職】、そして三つ目は【預言職】です。今日みなさまと話し合いたいのは、預言者となることについてです。

昔、予言というのは、不思議な力を持って未来のことを読み、現代に住んでいる人たちに話すことをしていました。しかし、神学的な預言と言う言葉は、そのような、前もって分かることを話すことではありません。まず、過去の歴史を見て、それから現在動いている様子を見ます。そして、過去の歴史からみて、現在のこの様子はいけないということ判断し、未来を推し量ります。「私たちの祖先はこのようにしたために、このようなよくない経験をした。だから、私たちもまたよくないことに襲われますよ」と叫ぶのが、預言という言葉の意味です。何か素晴らしい不思議な力をいただいて預言をするのではなく、現実的に過去の歴史を振り返る心があれば私たちは自然に預言者になれます。

そういう意味でカトリック信者は、洗礼を受けたとたんに預言者にならなければならないのです。神様が与えてくださったその勤めとして、預言者のように過去を正しく読み、今の状況を見て、このようにしてしまったらよい結果となるかどうか、判断する能力を持つべきです。自分中心の狭い目で世界を見るのではなく、私の先祖であり、家族であり、兄弟であった全ての人類の歴史を見ることです。それによって、「これはよくないことだ」という意思を持って叫ぶのが預言者の姿です。

カトリック信者である私たちはいつも預言者である使命を意識しながら目覚めていなければならない、そしてそのことをいつも考えてみなければならないと思います。

この世の中は、よくない勢力が力を持ちやすいです。なぜならば、優しい心を持っている人たちは権力から関心を捨て、避けようとしているからです。この世界をイエス様が見たらどれだけ悲しまれるか。正しい道を自分の意思で歩もうとする心が、私たち自身にも必要ではないかと思いました。

ありがとうございました。